

# カダム派の典籍と教義

山 口 瑞 鳳

## I. アティーシャ略伝

カダム派 bKa' gdams pa はアティーシャ Atiśa Dipaṇ-Karaśrījñāna (982—1054) の指導によりて生れた。しかし、アティーシャが開いた宗派ではない。この宗派という名称も今日考へられるものと異り、単に教理的傾向とそれを信奉する人々を指してゐる。人々が集団的規制を受けたものではない。

まず、アティーシャについて述べよう。11世紀前半に東西チベットと中央チベットに時を同じくして仏教再興運動が興った。西チベットのカリ mNga' ris 壬ソンヶ興運動が興った。西チベットのカリ mNga' ris 壬ソンヶ

たといふところ。

アティーシャはベンガルの王家に生れ、長じてナーランダー Nālandā に赴いて師をゆどめ、アヴァドヒー Avadhūti などにてて密教を学び、二十九才をすぎてからブッダガヤで大衆部の戒を受け、ティーベンカラ・シヨヨージョニヤーナを称した。以来、大小乘の論書を学び、大乗の菩提を志してながら Suvarṇadvīpa (gSer-ging pa, Dharmakīrti) に仕えて秘伝を受け、ハトナーカラ・シャーント・Ratnakaraśānti に学んだといわれる。その後ヴィクト・Rāṭnakaraśānti に入つて座首をつとめていた時、ガリ山の禪林を放めた。

彼は、1040年末にインレーを離れ、翌年ネペールに至り、一年をその地で過し、11年に西チベットのトントン mTho lding に到いた。トントンは大訳経僧リンチョン・サン＝Rin chen bzang po (953—1055) に似て、タントンラム教に対する態度を説いたといふわれ。カリ壬チャンチュ・ウーの要請に答えて『菩提道燈譜』 Bodhipat-hapradaya を著作して示した。

カダム派の典籍と教義

Strong nge ໃຈ່າ, サの弟コルン 'Khor re ຄົວຫຼື  
IHa sde ແລ້ວ ເນັດົກົບ ໝາຍີຕານ ໂກງ ໂກງ ໂກງ  
に至ると更に熱心になり、若くて才覚のあるチャ・シャン・ビウー・ヤング rGya brTson 'grus seng ge ແຫວັງ  
・シルティム・ゲルロ Nag tsho Tshul khrims rgyal ba  
(1011—?) をインレーに遣わして仏教を講ぜ、優れた學僧を求めた。その結果ついにアティーシャを招き入れることに成功した。その招請資金を調達する為に、カルルクに捕虜となつていた祖父もしくは父の伯父ソンケントイイハムー・ウー Ye shes 'od の身代金支払いを断念し

南のপঠা sPu r'ang が来た時、中央チベットから唐ナムバトゥン・ゲルウー・শান্তি 'Brom ston rGyal ba'i 'byung gnas (1005—64) が訪ねて來た。前述、アティーシャの帰途にあつたペルপেৰা Bal po rdzong に給争があつたので、アティーシャはキーロンビ一年近く足止めにあつた。この間にドムトゥンは中央チベットの同志に連絡してアティーシャを迎える手筈を整えたので、10四五五年アティーシャは中央チベットに還つた。

当初、アティーシャはクトゥン・শান্তি 'ব্ৰহ্ম Khu ston brTson 'grus g-yung drung(1011—75) に招かれてサムৰ সময় bSam yas সময় যালহন Yarlung のタンポチ Thang po che に至り、そして船を説いたが、クトゥンに対する不満からその地を去り、シアンボ江を北に渡り、ウン 'On の地を捨てサムイヒーに來た。そんで北朝の末裔কাশুন・পাই-ই-লাখা-জ্যোতি হাসন Bodhiradza に迎えられた。この間の聖場 graha bhāṣya をナクシা訳経僧と共に訳出した。

ヒンド、ヒヌトゥンに招かれて、ラサの西面にあるヒタン sNye thang に至り、更に、ナク・レクペー・シリーハーラ prNgog Legs pa'shes rab mpo トラサのムウルナ phrul snang (大昭寺) に迎えられた。その頃、清弁の『中觀心經』、同『思辨炎』の訳業に従い、『開玉鑑論』 Ratna-karandoghāta などを著作した。ラサから

イヘルバ Yer pa に移り住んだが、最後にヒタンに帰り、ムトゥンに見とられて歿した。

カリ王のために説かれた『菩提道燈論』によると、アティーシャの仏教は、小乘の戒に身を律して大乗空觀の理を学び、タントラ仏教の修法によって証得するものだ。その行動の一切は、我執によつて苦惱する衆生に悲愍の心を起して誓願を立て、そのために菩提を志すことがから始るもので、般若の智を得ることと利他の方便を尽すことが不離のものとして修められねばならないと説かれた。また、タントラ仏教に関しては、性的禁戒に触れるものは修めてはならないが、学ぶことは差支えないとも述べられている。

ただ、アティーシャ自身の無上瑜伽タントラに対する

反対されたり、タントラ仏教普及に積極的な姿勢を見せて弟子達に警戒されている。おそらく、中央チベットに根ざし残っていた瑜伽行中觀派的傾向を見て、単なる戒律復興以上の顯教の水準であるのに安堵してタントラ仏教を説いたのである。ナクツォ訳經僧が、Phags skor 「聖父子流」の『秘密集会』を学びたいと申し出たに対し、死期の近い自分の許を去らせて留めなかつたのも、アティーシャが、このタントラに対する徹底した解釈がチベットの将来に必要ないとを或は予見していたからかも知れない。

アティーシャの顯教的態度は冒頭の「チベット仏教の歴史」で紹介したように、確かに中觀帰謬論証派的であるが、『開玉鑑論』などには、『菩提道燈論』とその血

註には見えなかつた瑜伽行中觀派的表現が見える。尤も、後者でも清弁のとつた中觀自立論証派としての態度を月称などのそれと区別していないので奇異な感もある。

アティーシャのこのようないタントラ仏教への傾倒にもかかわらず、彼の周辺では居士ムトゥンや、新しいタントラ仏教を極度に警戒した。そこには二世紀にわたって古くタントラ仏教の紊乱した姿に接してきたチベット仏教界の拭いがたい危惧の念があつたものと思われる。

### II. カダムの三派とシャーキヤンヨリー

ムトゥン、クトゥン、パク・ムクペー・ムトゥンと教義典籍と教義カダム派の典籍

ムトゥン・クトゥン・パク・ムクペー・ムトゥン  
ムトゥン・セツサン・ワンチュク・ションヌ Se btsun dBang phyug gzhon nu の弟子であった。後者はダメー mDo smad の持律者ムトゥン・ラ・ペセル dGongs pa rab gsal やムトゥン・ムトゥン・ムトゥンの弟子である。三人が律を持たれ、ムトゥンの弟子であったトカム・イヘルバ・ゲルツォ・ムトゥン・ムトゥンの弟子であった。三人が律を持たれていたがは、これによつてムトゥン

られよう。そのためか、アティーシャは彼等に、戒を守つて仏教を学ぶことよりも、大悲の心から発願して菩提を志すような実践に入ることを熱心に勧めた。

ムトゥンはアティーシャ歿後の一〇五六年にラデン Rva sgren に密教道場を建立してアティーシャに従つた人々を命めて指導した。その弟子には、タントラ仏教の実践を重んずるダムガク派 Dams ngag pa の無上瑜伽系のタントラ仏教の信奉を受けたシャン派 gZhung pa がいた。他に、アティーシャを受け継ぐものとしてサンパ gSang phu 系の顯教主義の人々も数えられる。

ダムガク派のタントラ仏教は、むしろ、アティーシャ自身の意向を汲む方向で展開され、チム・カペ・シルティム・ベル sRyan singa pa Tshul khrims 'bar (1038-1103) などが現れだが、その弟子チャムルカ・ショヌム・ムー Bya yul ba gZhon nu 'od (1075-1138) になる。既にムトゥン派のようない顯教を学び、具足戒を受けるようになつて、顯密兼修の傾向を帯びてこゝた。

ボトワ・リンチム・セル Po to ba Rin chen gsal (1031-1105) に代表されるシャン派は、『菩提道燈論』を所依

の書かれた他に bKa' gdamz gzhung drug 「カダム大宗典」(bslab sbyong 2, sa rgyan 2, skyes tshon 2) を講説し、シムレカの意匠にやへて黒上瑜伽タントラに対しても消極的な態度を取ったのど、その弟子には持律は熱心で、顯教主義のものが現れた。たゞばは、シヤハク・カハラン・タク Shar ba pa Yon tan grags (1070-1141) などはその傾向が強く「究竟一乘宝性論」Uttaratantra を説き、かたねい、月称等の中觀帰謬論評派の紹介者やあつたペツアド・リマ・タク Pa tshab Nyi ma grags を後援し、アティーシャの『菩提道燈論』血証の説をもつての中觀と唯識の両立が可能と考えていたらしく。

リク・レクペー・シヒーハアはトゥルナンにアティーシャを迎えて厚く遇したが、一〇七三年にサンプ・ネウト shes rab (1059-1109) によって一圓の盛況をもたらされた。後者は一七才の時からカシヨミールに一七年留学し、ペールにお住り、顯密兼修の大学匠になつた。多数の翻訳を行つたばかりか国内外各地で論理学、弥勒の五

たといひにたるるふれぬぐわからぬ知れなご。

カダム派の名を冠して呼ばれ、やの副職いやおゆみに『カダム宝印集』bKa' gdamz glegs bam rim po che なるものがある。エリビサウルスの歴史 "Iha chos bdun ldan"、「神海七の島をもつて」などと呼ぶ。〔母〕ルハ・意の三業に配し、三藏による「闇」「三學」による「闇」、四尊による「終」くじ選むるなどを説く。エリビサウルスはアティーシャの大尊として知られる黒上瑜伽母タハリの Cakrasamvara と Hevaja を詮が、作タントラの Trisamayavyuharajja を駆逐するに置き換えたものである。エリビサウルスは無上瑜伽タントラとの間をもつて後世の偽作とされるべきものであらう。

アティーシャ歿後一五〇年を経て、ヴィクラマシーラ

伝承では『カダム宝印集』はサンप学堂のメンガク派に由来させられているが、京田野伯敏氏の研究が示すよ

法・血立謬論派の中觀等を講説したが、その主張はシャーンタクシタ師弟の説にむしろ同調するものであった。ただ、持戒して顯密を兼修し、全仏教を含むといふなど懐柔するにアティーシャの説示を承け継ぐものと評価され、メンガク派 Mang ngag pa (秘密伝承派) とかシヨンルク派 gZhung lugs (米揚) と呼ばれ、カダム派の一方の祖といわれた。

このネウトクの大学堂では、その後、チャペ・チュー・キ・ヤンダ Phyā pa Chos kyi seng ge (1109-69) が現れ、一八年間住持して多くの弟子を集め、ペツアド・リマ・タクによって詮出紹介された月称による帰謬論評派の中觀を批判して中觀血立謬論派の立場を示した。しかし、その弟子アンナクペ・シヤンダウー・センゲ gTsang nag pa brTson 'grus seng ge やヤチャ・チャハリバ・シオンジルマ bya Byang chub brtson 'grus (?-1185) はむしろ月称説をひいてチャペを批判し、早くも中觀論争を始めていた。チャペの系列の人によると、弥勒の五法を講じ、瑜伽行中觀派に連なる位置にあつたが、その功は、むしろ論理学を極め

大僧院がの回教徒の難を脱れてシャーキヤシヨーベド・ルハ・シカブリ Kha che pañ chen と呼ばれたるの名僧は、ペツアド・シヒーハア Tshul khrims shes rab (1173-?) と呼ばれたのである。一一〇四年の入国以来一〇〇年、一一一三年にいた。一二〇四年の入國以来一〇〇年、一一一三年にカラのペトランで貢安殿をしてカシヨミールに帰国するが、インド仏教最後の伝統を伝えるために中央チベットの西寄りのツアン gTsang、東側のウー dBus の間を幾度も往復した。北はラダーンから南はニヒル gNyai ロダク IHo brag とまど足跡を残した。カダムのみならず、カギュー、サキヤのチベット仏教各派の間を通り、弥勒の五法を講説し、論理学を教え、具足戒を授け、這次第を説いたばかりか、『齒輪』『勝樂』『勝金剛』『秘密集会』の諸タントラを伝えた。

シャーキヤシヨーベドは言ふ。

心は常に菩提を求めるが、行為は衆生の利益に努める。苦樂は夢の如きを知る故に、学者は利他を修習する。

慈悲の核心として空性を悟る者は、慈悲、福徳を無

限に求め続ける道に立つとゆして、その『菩提道次第撰集』*Bodhisattvamārgakramasamgraha* のうちに

幻の如き外界には抱えられる対象がない。それのない處に抱えるもののある筈がない。識のみが知るものであるが、(識もまた) 太初以来不生の法であるから我々はない。慈心のみにて輪廻の界を益し、般若を日常のもとのとして (daman pas) 清潔する。

と述べて、瑜伽行中觀派の見解を示していく。これらの趣きは、カチヨ・ペンチヨンがタントラを説きながら『見行清淨説示』*Visuddhakaranaśacaryopadeśa* を示した

法律師であったことと共に記憶されねばならない。

### 三、タントラ仏教に対する態度

#### —『菩提道燈論自註』—

シャーキヤシュリーバードラはカギューワー系のトップ訳經僧の招きによりてチベットに至ったのであるが、インド正統仏教とも言うべき伝統を伝えて、カギューワー派を含めたカダム派一般とサキヤ派に大きな影響を与え、後者をカダム化したつまり、顯教研修に向わせた。そのサキヤ派

がツォンカパの仏教を形成するのに大きく関与した。シャーキヤシュリーワーは、アティイーシャよりも更にタントラ仏教に傾倒していた。彼の『秘密集会』に関する相承は「新サキヤ派」*Sa lugs gṣar ma* としてサキヤ・ペンチ

ハン *Saskya pan chen* (1182—1251) に伝えられ、ツォンカパにも及んだ。シャーキヤシュリーワーが出家者集団の戒律を遵守したことでも明かであるが、戒律とタントラ仏教の関わりを詳しく述べたものに残念ながらまだ接することができない。

カダム派の主流が示したタントラ仏教に対する態度は既に見たとおりであるが、後年ツォンカパが重視したとされるゴク・ロ・ドン・シヒーラブやトルンペ *Gro lung pa blo gros* 'byung gnasなどの『道次第』でその点がどのように扱われているのか、『カダム宝典子』との相違という点からも関心が寄せられるが、残念ながらこれもまだ知る手段がない。

これらの原点にあるアティイーシャの見方は、その時代のタントラ仏教に対するインンド仏教の代表的な態度とも言えるので、羽田野伯猷氏がかねて明かにしていくよう

にカダム派との区別を意識して、その要點を『菩提道燈論』の自註から取り出して見よう。

を示してくる (f. 89a<sup>3</sup>—f. 89c<sup>4</sup>)。

ついで、密呪の乗に対して誤った見解が起るのを排し

てある。まず、タントラの密意を知らず、しかるべき師

僧によって後見されていないために、タントラの真実を

解さずにタントリストを自称するものは地獄に墮ちると

して実体に執着し、愛欲を離れえないものが等閑に密呪

の行に入るのを排し、仮にこのようなものに師僧の灌頂

があったとすれば、師資共に地獄に落ちるとしている。

(呪縛) や結合(性交)が常人に行われることはないこと

て『悪魔の説』と言つてはならない」とするアティイーシャの師の言葉も引用され、このように排斥する人達がいたといふことも示している。仏説であるとする考え方を内容上から承認した上で、邪説視する人々を駁むべしとしている。これが基本的な立場である。

### 『菩提道燈論』本文末尾には

本初仏の大タントラに従つた専心による禁斷の行のために「秘密」「般若」灌頂を、梵行者は取るべきではない。もしも灌頂を受けてそれを受持するなら、梵行難行に住するものが禁斷を行ずるものになる故にその苦行と律儀が損われ、この苦行者は波羅夷罪を犯すことになり、彼が悪趣に墮るとは必定であるから成就者となるともありえなく(f. 240b<sup>1</sup>—f. 241a<sup>2</sup>)。とあるが、これを注釈して師僧達の教説によるのである。

といふとわり書きをして

師僧のお言葉によると、『灌頂を確かに示すもの』と呼ばれるものによれば次のように言われる。即ち、灌頂には二種がある。在家のものに対するものと梵行者に対するものである。在家のものに対するものとは

かくの「」とくであるから、梵行者達が密呪「の乗」に入るべきでないものであると言つうなら「とする設問に答えて『燈論』本文では」「一切のタントラを聴き、詣し、護摩を焚き供養するなどを為す」とは阿闍梨灌頂を受ければ許せられるであらう」といふのが述べたのである。

かくの「」とくであるから、梵行者達が密呪「の乗」

として、それでは在家仏教徒も梵行者と同様に両灌頂無しに目的が達せられるのではないかと設問しながら、在家仏教徒の灌頂を否定してはしないのが注目される。

「それ自体を了知する」とに過誤はない」と『燈論』本文に」詣う、この「」の意義について、私に師僧達が教えて下さったことが多くある。一人の立派な師僧が仰せになるには、「慈悲心によって有情の利を了知し、慈悲の念に駆られた菩薩が何をなしてもその心相続に過誤ではなく、そのあとにも福德が大いに増えるであろう」と仰せになつてゐる。これは忍(無生活忍)を少しく得たものである。そのあとにも福德が大いに増えるであろう」と仰せになつてゐる。これは忍(無生活忍)を少しく得たものである。ある立派な方の仰せになるには「一切法を幻と悟り、その眞実 de kho na nyid を」知する瑜伽行者には悪業となるものは何もないのだ、

次のように言われる。『〔一切法は〕水月のごとしと知る瑜伽行者なるものは罪にも福徳などにも決して染る」とはないであらう』と内と外にある「」のものはすべて心「の所生」であり、幻の如きである。即ち、それはまた常住でなく、断滅でなく、その双方であるともいふのである。この「」の所生は、水月のごとしと知る瑜伽行者なるものは罪にも福徳などにも決して染る」とはないであらう』と内と外にある「」のものはすべて心「の所生」であり、幻の如きである。即ち、それはまた常住でなく、断滅でなく、その双方であるともいふのである。

分別せず、実体に執着する毒にまみれていないので、そのように誰もが「実体と」見るものを幻と了知して、過誤がない」と仰せられてるのである。法の最勝なるものを少しく得るものに誤りはないのである。師僧乞食比丘の「お説が」誤りとならないことは、師僧御前が著わしなさった御書物そのもののうちに見らるべきである。この「ようすにタントラを了知する」ことは初発意の人人が今「そのように」しても過誤はないのである。他の立派な方が次のように「述べ」、「聖迦葉所問經」と「聖転女授記經」と「吉祥最勝第一本統」と「降伏不空本統」とそれら以外の他の諸タントラと聖薦樹と聖提婆アーチャーリヤ等の示す本意に従つても〔それは〕過誤にはならない。その意味するところは、真実を了知することに過誤ではなく、頂上を少しく得た時において「そのよう」である」と仰せになつてゐるのである。他の立派な人は次のように「述べ」、「一切法の不生なることとの勝義を悟る心を起し、それが心相続に生じた者にとって過誤はない。即ち、諸法の真実を了知したものに過誤はないのであ

る」と仰せになつてゐる。即ち、このことは諦を見るものにとつて過誤となるものはないのである。従つて、道に就いている瑜伽行者によつて、過誤のないことを過誤になるとの二つはよく知られるべきである。如意宝珠のような化身「釈尊」が「くなられ、聖龍樹などの大学者達もいなかで、牟尼の正法が滅びようとしている今日の時に、狂人のような顛倒した悟りをもつ人が多く現れ、相伝の師僧からの教説を欠いたまま、経論の書籍を読むだけで深甚な御教説の大海上の本義をあげつらう。彼等は盲人の如くなつてゐるので、大乗の最勝の道を彼等が知ることはできない。従つて、顛倒した悟りに隨らべきではない。正しいこの源である大乗の道も、眼と似た師僧がいなければ、見えず、見ず、見ることがないであろう。大乗は大海の如くに深く、虚空のようによることに広大である。師僧「の導き」を離れて氣儘に語るものはその経論の書籍を見るだけで満足して師僧に依ろうとしない。彼等が大乘の歴史さえも知らないのであれば、深甚廣大な本義を見ることがどうしてありえよう。大乗のよ

い薦習をもつた、立派な師僧に支持された人物には、

学ぶものは誰でもその後に従う。今日教法がまさに滅びようとしている大きな怖れのこの時が至つてゐるからには、悟りの道にある学者達は心して、よい師僧の相伝をもつ人物がいかなる國、いかなる方角の地にあらがを尋ね、求めた後、いく月いく年であれ「その人物に」依止し、しかるべく奉仕して満足して貰う。その人物の身体と言葉二つの行状がまことに悪く振舞われても、それを見ることなく、正法を「学び」取るべきである。たとえば、蜂が花を見つけた時、蜜を探り去つた後花を残すように、かの学者もそれと同じように行動する。行状を見ないでその教説を聞く。その教示において心を修習すれば今生そのものにおいて苦提を得させるからである。「勝樂」等の密呪の教説を「よし」相伝をもつた師僧に求める。第二灌頂を受けるのでをやめながら、密呪の本義を知らないならば、多くの分別に縛られてくるので、速かに成仏することはないであろう (f.291a<sup>2</sup>—f. 292a<sup>2</sup>)。

として、梵行を保つていても密呪の本義に達しなければ

為すといろがないと述べ、末世の姿を伝えて、

また、「次のようにも」言われてゐる。牟尼の教法は衰えてゐるが、大導師の教法を破壊するものは、今日教法を壞すとすれば、仏自身の弟子を除いて外道や俗人は牟尼の教法を誰も壞すことは出来ない。特に出家した者が壞す。あるものは密呪タントラに随つて顛倒して行動し、他人にも顛倒して教示する。あるものは般若波羅蜜の如実の真実義を知らないまま、因果など世俗諦を否定し、自性は清淨であると言つ。あるものは波羅提木叉に説かれた限りの教を捨て去つて、在家の者と同じように寺院の中で土地や利益などを口にして行動する (f. 292a<sup>3</sup>—c)。

と述べる。更に、「楞伽經」の一節を引用し、大学者世親 Nor gyi rtsa lag の言葉を添えて結んでくる。

言動の如何を問わず、すぐれた伝統の師僧を選ぶといふことが述べられるところに、真理を伝えるものと世俗の倫理を守るものとの間に懸隔もあらうとする考え方を見られるのは異様である。最も重要なことは、既に言及したように、第二灌頂を受けることなく、密呪の本義が

得られるとするならば、第二以後の灌頂は不要であり、得られないであれば瑜伽行者による知解も無用となる筈であるが、この点は論じられていない。

タントラも仏説であるという大前提を受け入れた後に、その在家的実践方法を瑜伽の中にも取り入れねばならないとして、単純に波羅提木叉との抵触の起る線で実践を禁じ、知解に止めよとしているのである。ここにはタントラ自体に対する解釈学による変質への試みは全く見えない。後のカダム派一般には無上瑜伽に対する知解が大きな意義をもたらさないと理解されたのであろう。無上瑜伽タントラが次第に顧みられなくなつたのも当然のようと思われる。

この他、師僧つまり、「ラマ」による指導が密呪の乗には不可欠として強調されているのが見られる。「ラマ教」の名がここに由来するとすれば、それはアティーシヤのインド仏教を指すものとなることにも注意したい。

(やまぐち すいこう・東京大学教授)